サザンカとツバキ（12月の自然庭園では）～みぬま見聞館トピックス～

このページを印刷する

このページでは大宮南部浄化センター・みぬま見聞館のトピックスを紹介をします。

サザンカとツバキ（12月に自然庭園で観察できる動植物について）

自然庭園では、二十四節気（にじゅうしせっき）の立冬（りっとう）を迎え、春待月（はるまちづき）の別名が示すように、風の冷たさが身に染みる季節になってきました。七十二候で立冬の始まりを、山のお茶の始まりに開くと書く「山茶始開」（つばきはじめてひらく）と呼ぶのですが、今月は、ここでツバキと言っているサザンカについて、お話をさせていただきます。

サザンカは、ツバキ科ツバキ属の常緑小高木の日本固有種で、九州や沖縄・四国・山口県に自生して、園芸種やツバキとの自然交配種など300種以上の品種があるそうです。花も一重のものや八重のもの、色も白色や紅色、桃色など多彩で、高さも10メートル程度になる品種もあるそうです。ちなみにサザンカの花と聞くと、巽聖歌（たつみせいか）作詞、渡辺茂（わたなべしげる）作曲の焚火の歌から赤色が思い浮かぶのですが、野生種の花は白色だそうです。
名前は、九州地方でサザンカの葉を、お茶として飲んでいたことから、山に生えるお茶の木からきていると言われ、中国語でツバキを指す山のお茶と書く山茶（さんさ）に花をつけてサンサカとしていたものがサザンカに変化したと言われています。

このサザンカ、ツバキと見分けるのが結構面倒なのですが、簡単な見分け方のヒントに、「柿くへば 鐘が鳴るなり法隆寺」の俳句で知られる正岡子規が読んだ「山茶花を雀のこぼす日和哉」（さざんかを すずめのこぼす ひよりなり）があります。意味は風も吹いていない穏やかな晴れた日に、スズメが止まっただけでサザンカの花がこぼれるように散っていますとでもなるのでしょうが、ツバキは花一輪が、まとまって落ちるのに対し、サザンカは花びらが一枚ずつ、ハラハラと散るのだそうです。他にも花びらが平らになるまで開き、主脈（しゅみゃく）と呼ばれる葉の中心にある葉脈や、茎につながる葉柄（ようへい）に短い毛が生えているのがサザンカで、ツバキは花びらがカップ状になり葉脈に毛は生えていないなどの違いもあるそうです。
面白いことに、私の好きな日本最古の歌集である万葉集には、約160種の植物が読まれているのだそうですが、ツバキを読んだ歌は11首あるのに、サザンカを読んだ歌は一つもないのだそうです。これは当時ツバキとサザンカが区別されていなかったからとも言われていて、ツバキは奈良時代に編纂された日本最古の書物である「古事記」にも登場するのに、サザンカが文献に登場するのは、その約1000年後、江戸時代初期に書かれた生け花の書籍である立華正道集（りっかしょうどうしゅう）で、初めて俳句として読まれたのも1684年の芭蕉七分集（ばしょうしちぶしゅう）の「冬の日」で、岡田野水（おかだやすい）が読んだとされる「たそや とばしる かさの山茶花(さんざか)」だと言われています。

そんなサザンカですが、お茶にするとジャスミンの花にも似た甘い芳香があり、実から取れるユチャ油と呼ばれる油も良い香りがするため、椿油と混ぜたカメリア油は、純粋な椿油よりも高級なものとされているそうです。
ちなみに、サザンカの花言葉は色ごとにちがった花言葉がついていて、白い花が「理想の恋」、赤い花は「あなたがもっとも美しい」で、ピンクの花は「永遠の愛」だそうです。

多くの植物が、アプシジン酸という休眠ホルモンにより開花が抑えられてるこの時期、アプシジン酸の生成量が少ないがゆえ、色を失いつつある世界で鮮やかな花を咲かせているサザンカを一目見に「みぬま見聞館」の自然庭園を、是非訪れてみてはいかがでしょうか。

サザンカ
花の少ない冬に咲く鮮やかな花です

サザンカ
この冬はいつもより早めに開花しました

サザンカ

自然庭園の中ほどに咲いています

オオタカ

自然庭園で時折見かけるようになりました

ハイタカ

こちらも時々自然庭園にやってきます

ツミ

小さいですが猛禽類です

チョウゲンボウ

みぬま見聞館の敷地内の高い場所にとまっています

ノスリ

低空飛行が得意です

トビ

自然庭園で撮影できました！

ダイサギ

羽を広げるとホントに大きい！

 アオサギ 大きいのでなかなか怖い感じです	 ゴイサギ 愛嬌のある姿ですね